

谷津 はつね — 生命の誕生を見守る —



谷津はつね (谷津家提供)

伊具郡耕野村(現在の丸森町)に、人々から絶大な信頼を集めた助産師がいました。

生命の誕生を見守り続けたその人の名前は、谷津はつね。村の人は、親しみと尊敬をこめて「はつね産婆さん」と呼びました。

はつねは、明治四十(一九〇七)年、耕野村に生まれました。幼いころ親切で面倒見がいいので友達に大変したわれていました。はつねは、大きくなるにしたがい、人の役に立つ仕事をしたいと考えるようになりました。はつねが生まれた耕野村は山深く、冬になると背たけを超えるほど雪が積もる所でした。当時、出産は家で行うことが普通で、お産が近づくと、家族が助産師を呼びに行っていました。しかし、耕野村では、助産師のいる町まで遠いため、戻るまで何時間もかかりました。陣痛に耐えながら助産師を待つ時間は、産婦にとってつらいものでした。また、当時は、お産の時に赤ちゃんが命を落とすことも、今より多くありました。それを小さいころから見てきたはつねは、自分が生まれ育った村の尊い命を守りたいと助産師を志し、十五歳で親元を離れて仙台の学校で学び始めました。卒業後は医院に勤めながら、寝る間も惜しんで医学や看護学の勉強に打ちこみました。そして、二十四歳の時、ついに耕野村に助産院を開業することになったのです。

ある雨の夜の事です。激しく戸をたたく音がしたので戸口を開けると、一人の男がかけこんできました。「はつね先生、すぐに来てください。」

男は、二日前に診察した産婦の夫でした。妻が産気づいて苦しんでいると言います。はつねは、それを聞くと口をぎゅつと結び、うなずきました。そして、用意してあった合羽を、もんぺの上に素早く着て、家の前に停めてある自転車に飛び乗りました。山道にさしかかる辺りから雨は激しさを増してきました。目を開けていられないほどの強い雨です。街灯のない山の中は真っ暗で、足元は全く見えません。どろにタイヤを取られて何度も転びそうになりながら、二人は、一心に先を急ぎました。

ようやく家に着くと、はつねは、すぐに産婦のそばに行つて声をかけました。「待たせましたね。どうですか。」

「はつね先生の顔を見て、ほっとしました。」  
産婦は、痛みをこらえて弱々しく笑いました。はつねも安心させるようにほほえみ返しました。しかし、診察するとすぐに固い表情になりました。赤ちゃんが逆子で予想以上にお産の進行が遅く、体力の消耗が案じられたのです。産婦は、長引く陣痛に疲れ果て、ぐったりしていました。

長い夜が明け、空が白み始めました。  
(このままでは、母子ともに命が危なくなる。もし、自分が二人の命を守れなかったら……。)  
はつねは、自分の心臓が早鐘のように鳴るのを感じました。不安と恐怖におしつぶされそうになりながら目を閉じた時、はつねの耳に、小さな声が聞こえてきました。  
「二人の命が助かるためなら、おらの命をあげてもいい。お願いだから助けてください。助けてください。」

絶大：ほかのものくらべようもないくらい大きな様子。

助産師：出産を助ける職業。

尊敬：相手の人格や能力、行いなどを立派だと思ひ、尊び、うやまうこと。

産婆：現在の助産師のこと。

陣痛：出産の時に一定の期間で起る腹痛。

産婦：出産する女性。

産気：子どもが生まれそうなき配。

もんぺ：女性が働くときに着る衣類。

逆子：お赤ちゃんの姿勢が正常の場合と逆になっていること。

消耗：気力や体力をすりへらすこと。

早鐘：火事などを知らせるために、激しく続けて打ちならす鐘。

どうかお願いします。助けてください。」

それは、産婦の夫の声でした。部屋の外で、母子の無事を祈る言葉を何度も何度もくり返しているのです。はつねは、その言葉を、しばらくの間じっと聞いていました。そして、大きく息を吸い込み、前掛けのひもを結び直しました。産婦のそばにひざまずくと、その手を力強くにぎって言いました。

「みんなが赤ちゃんの誕生を待っていますよ。さあ、がんばりましょう。」

はつねは、これまで学んできたあらゆる技術を使い、懸命にお産の進行を助けました。産婦を安心させるために声をかけ続け、母子の様子に注意深く気を配りました。目の前の母子のために全力をつくしているうちに、さっきまでの不安が消え去り、自分の内側から力がわいてくるようでした。

日が高く昇りました。昨夜の雨は上がり、鳥がさかんにさえずっています。

「さあ、生まれますよ。お母さん。」

はつねがそう声をかけた時です。

「——オギャー。オギャー。」

産声が高らかに響きました。元気な産声が聞こえると、家中が喜びに包まれました。

母親は我が子を抱きしめ、涙を流しています。赤ちゃんは、元気いっぱい手足を動かしています。

はつねは、一人外に出ました。山の緑が日の光にきらきらと輝き、空には大きな虹がかかっています。家の中から、新しい命の誕生を喜ぶ家族の声が聞こえ



前掛け…  
着物などをよこさないために、衣服の前の部分に付ける布。

てきます。その声を聞きながら、はつねは、いつまでも虹を見上げていました。

六十一歳で引退するまで、はつねは、助産師の仕事に情熱を注ぎ続けました。開業以来三十七年間に取上げた赤ちゃんは、実に四千人にのぼります。そのうち、ただの一人も命を落とすことはありませんでした。

人々は語り継ぎます。はつねが、雪まみれになりながらお産に駆けつけてくれたこと。どんなに遠い家でも赤ちゃんの湯浴みの世話に毎日通ってきてくれたこと。自宅の玄関の黒板には、何軒もの行き先と順番が書かれ、眠らないまま訪問を続けていたこと。

貧しい人からは代金をもらわず、だれに対しても優しく公平だったはつね。人の役に立ちたいという志をつらぬき通したその生き方は、今も人々の心に深く刻まれています。

(イラスト 加藤 千代)



谷津はつねと愛用の自転車 (谷津家提供)

湯浴み…  
湯に入って体を暖め、また洗うこと。入浴。

谷津 はつね

谷津 はつねは、明治四十(一九〇七)年、耕野村(現在の伊具郡丸森町耕野)に生まれた。仙台で医学や看護学を学んだ後、故郷の耕野村に戻って三十七年間にわたり助産師をつとめた。多くの自宅出産に立ち会ったほか、産婦や新生児の健康に関する指導を行い、山間地域の医療と福祉に貢献した。